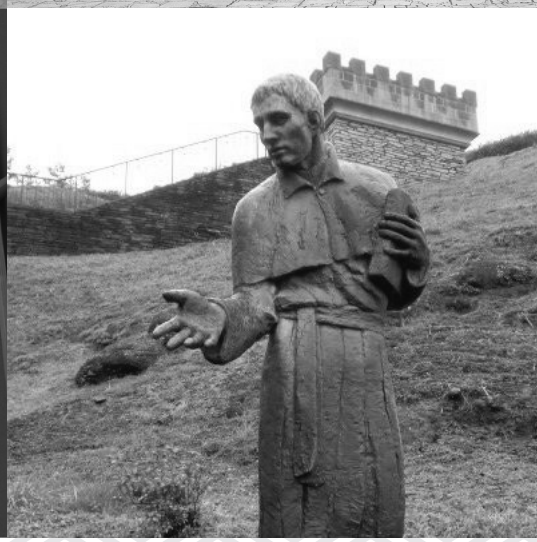










第3章

岐阜城下における信長のおもてなし

永禄10年（1567）～天正2年（1574）

【信長 34歳～41歳】

第3章

岐阜城下における信長のおもてなし

永禄10年（1567）～天正2年（1574）

【信長 34歳～41歳】

永禄　10年（1567）	34歳	岐阜（ぎふ）城の修築、山麓の居館を造営する
永禄　11年（1568）	35歳	武田信玄からの使者（秋山虎繁）を鵜飼で接待
永禄　12年（1569）	36歳	京において、ルイス・フロイスと初めて会う
		2ヶ月後にキリスト教の布教を許可する
		ルイス・フロイス、岐阜に初めて訪れ、
		山麓の居館、山上の城に驚嘆する
		公家・山科言継（やましなときつぐ）、信長のもてなしを受け岐阜に1か月滞在
天正　2年（1574）	41歳	堺の茶人津田宗及（つだそうぎゅう）、信長のもてなしを受ける

3－1　迎賓館としての岐阜城

信長は岐阜城に入城するとすぐに、山上の城と山麓の居館を修築し、金華山と長良川を活かした独自の「おもてなし」空間を造り上げます。その様子は宣教師ルイス・フロイスによる記録と昭和59年（1984）から続く発掘調査により徐々に姿を現してきています。

山麓の宮殿

ルイス・フロイスが岐阜を訪れたのは、永禄12年（1569）で、信長が入城して2年目のことでした。フロイスは、居館に向かう途中の信長と路上で対面した後、信長自らの案内で居館の中を見学することになります。そのとき、フロイスに加え、佐久間信盛、柴田勝家、京都からの客人合わせて10人程度も一緒だったとされます。

居館は信長が命じなければ入ることはできない特別な場所で、大工と石工、3、4人の家臣がいるだけでした。

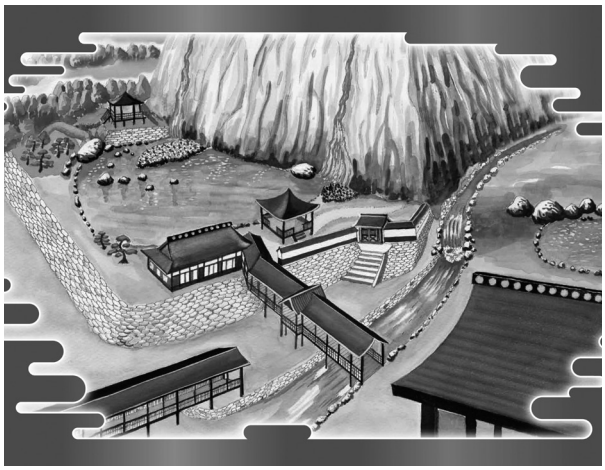
フロイスは居館のことを一貫して「宮殿」と表現しており、信長自身が自らの栄華を誇示するために建設したもので、美濃の人々は「信長の極楽」と呼んでいたそうです。

居館に入るとまず広間があり、そこには見晴し台と縁があって町の一部が見えました。

1階には15から20の座敷と5、6の庭園、2階には奥方と女性の部屋がありました。内部は鍍金された屏風や純金製の留め金や釘、日本と中国の物語を描いた羽目板、金蘭の幕などで飾られ、それは豪華でした。

3階には茶席がいくつかあり、その一つには庭もありました。

3、4階の見晴し台と縁からは町が一望できました。



庭園イメージ図

フロイスはゴアのサバヨ（インドのゴアにあった宮殿でこのときはポルトガルのインド総督部）を引き合いに出して、信長の居館を賞賛しています。

1階部分にある庭園のある池は、深さが20センチ程度で底には白い砂が敷かれ、さまざまな種類の魚が泳いでいました。また、各種の花や香りのよい草木も植えられており、これらを見たフロイスは、「すべてが珍しい」と伝えています。

発掘調査によって見つかる建物の痕跡として、礎石、壁土、木材、釘、瓦などがあります。信長公居館跡では出土した瓦を分析し、金箔瓦を使っていたことがわかっています。外観を示す資料はありませんが、建物や庭からの眺望がよかったことはわかっています。また、信長は外から居館を見たときの景観も意識していたようです。これまでの発掘

調査から「自然物のように見えるように人工的に手を入れた谷川や岩盤を介して結び付けられた巨大な造形物」だったのではないかと考えられています。

山上の城

信長からキリスト教布教の許しを得たフロイスは、別れの挨拶のために信長の元を訪れますが、そこで信長に城を見せたいから出発を2日延ばすようにといわれます。

城とは「山上の城」。登城ルートはおそらく七曲道（現七曲登山道）であったと考えられています。フロイスが後に著した『日本史』には、「山に登っていく途中に、一つの堡塁（太鼓櫓）が設けられており、その下には人々が通る非常に大きい入口が付いていました」とあり、門を見下ろす高い位置に砦があったことがわかります。

砦には15から20人の若い貴人が交代制で昼夜を問わず警備していました。さらに登ると、「入口に続く2、3の大きな座敷（台所）があり、そこに100人ほどの若い貴人がいた」とあります。この2つの入口は一ノ門、二ノ門、砦は太鼓櫓に相当すると考えられています。

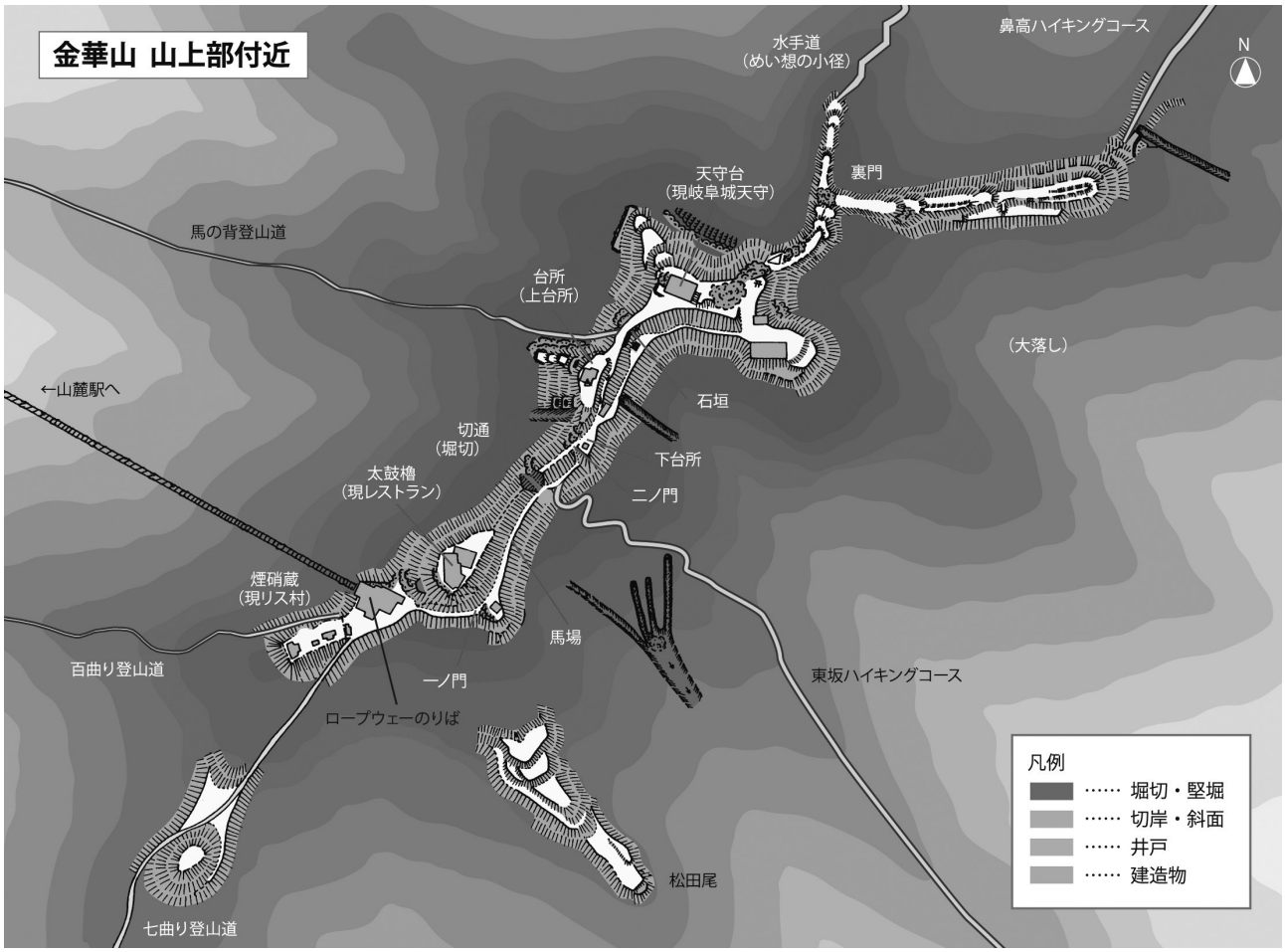
さらに、その先（天守台）は、女性や息子たちだけが使える特別な空間で、座敷は黄金の屏風や約2,000本の矢で飾られ、窓からは美濃国と尾張国が見えました。フロイスたちはここで歓待されます。


信長公居館の発掘現場


信長公居館の再現映像



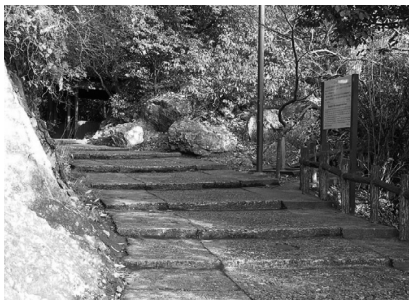
岐阜城天守 ※昭和31年(1956)に再建されたもの。



岐阜城跡山上部概要図(作図:中井 均『岐阜県中世城館跡総合報告書』2003より一部改変)



岐阜城に残る石垣



一ノ門周辺



二ノ門付近の石垣

3－2　岐阜城の歴史

元来、伊奈波神社は岐阜城のある金華山（稲葉山）の麓に位置し、それにより金華山は古くは「神聖な山」として人々の信仰を集めていたようです。

金華山と伊奈波神社

金華山と南側の峰続きにある瑞龍寺山には弥生時代の墳墓「瑞龍寺山頂遺跡」があり、古墳時代には多数の古墳が築かれ、はるか昔から、この山と人々との結びつきが深かったとされています。

「伊奈波神社略誌」によれば、天文8年（1539）ごろ、斎藤道三が稲葉山城に入るに当たり、伊奈波神社を現在の場所に移したと伝えられています。

稲葉山城から岐阜城へ

稲葉山城は1200年頃、鎌倉幕府の重臣二階堂行政が軍事目的のための稲葉山に砦を築いたのが始まりとされています。

15世紀後半には応仁・文明の乱の影響で室町幕府の権威が失墜し、美濃国も争乱に巻き込まれます。美濃守護代・斎藤利永が、この稲葉山城を修復して居城とします。大永5年（1525）斎藤氏の家臣の長井新左衛門尉たちが謀反を起こして稲葉山城を乗っ取り、天文2年（1533）には長井新九郎規秀（後の斎藤道三）が跡を継ぎ、城主となります。道三はここ稲葉山城を拠点とし、麓には本格的な城下町を整備したといわれます。その後も美濃国の内乱に乗じて、下剋上を進め、天文21年（1552）美濃国守護の土岐頼芸を追放し、名実ともに美濃の実権を握ります。

以降、美濃国を取り巻く情勢はめまぐるしく変わっていきますが、永禄10年（1567）には、信長が稲葉山城を攻略し、岐阜城と名をあらためて居城とすることになります。

信長以後の岐阜城主は年表をご覧ください。

伊奈波神社（岐阜市伊奈波通1丁目1）



時代	年号	西暦	城主名	備考
鎌倉	建仁 年間	1201～1204	二階堂行政	鎌倉幕府の軍事目的のための築城と伝えられる
			佐藤朝光	
			伊賀光宗	
			稲葉光資	
	正元 年間	1259～1260	二階堂行藤	関市周辺に領地を持ち、新長谷寺を再興する
室町	応永 年間	1394～1428	斎藤利永	土岐氏の守護代で城を修築する
			斎藤紗椿	応仁・文明の乱で京都へ出陣
			長井新左衛門尉	斎藤道三の父親といわれる
	天文 年間	1532～1554	斎藤道三	稲葉山城を修築して入城　弘治2年 義龍と戦い死去
	天文23年	1554	斎藤義龍	永禄4年5月 病死する（34歳）
	永禄 4年	1561	斎藤龍興	若年で跡を継ぐが、竹中重治によって一時占拠される
	永禄10年	1567	織田信長	小牧山城から稲葉山城に移り、城下町の発展に寄与
				天正4年には安土城に移る
安土	天正 3年	1575	織田信忠	信長の後を継いで岐阜の繁栄に尽くす
				天正10年 本能寺の変で明智光秀に攻められ戦死する
	天正10年	1582	織田（神戸）信孝	信長の三男で伊勢神戸城から移る
				天正11年 秀吉に攻められ開城する
	天正11年	1583	池田元助	天正12年 小牧・長久手の戦いで戦死する
桃山	天正13年	1585	池田輝政	天正18年9月 三河吉田城に移り、後に姫路城主となる
	天正19年	1591	豊臣秀勝	秀吉の養子で羽柴姓を名乗り、後に朝鮮に出陣し病死する
	文禄 元年	1592	織田秀信	信長の嫡孫で、慶長5年8月徳川軍に攻められ開城
江戸	慶長 6年	1601		廃城となる、天守、櫓、石垣等を加納城へ移す

岐阜城の廃城

難攻不落と考えられていた岐阜城も最後の時を迎えます。慶長5年（1600）、岐阜城は関ケ原の戦いの前哨戦の舞台となります。城主の織田秀信は石田三成率いる西軍についたため、福島正則、池田輝政らの東軍方に攻められます。秀信軍は力及ばず岐阜城は落城し、秀信は高野山に追放されました。秀信は、このとき戦死した将兵の菩提を弔うために、岐阜城の血染めの床板を、信長・信忠父子の菩提寺である崇福寺本堂の天井に張りました。「血天井」として、今でも鎧の血痕が付着しているのが見られます。

関ケ原合戦で勝利した徳川家康は、岐阜城を廃城として、南に加納城を築きました。



崇福寺本堂「血天井」

3－3　岐阜城下町の様子

信長が岐阜城を居城とした時代、城下町はどのような姿をしていたのでしょうか。その様子をルイス・フロイスの『日本史』や山科言継の『言継卿記』から読み解いてみましょう。

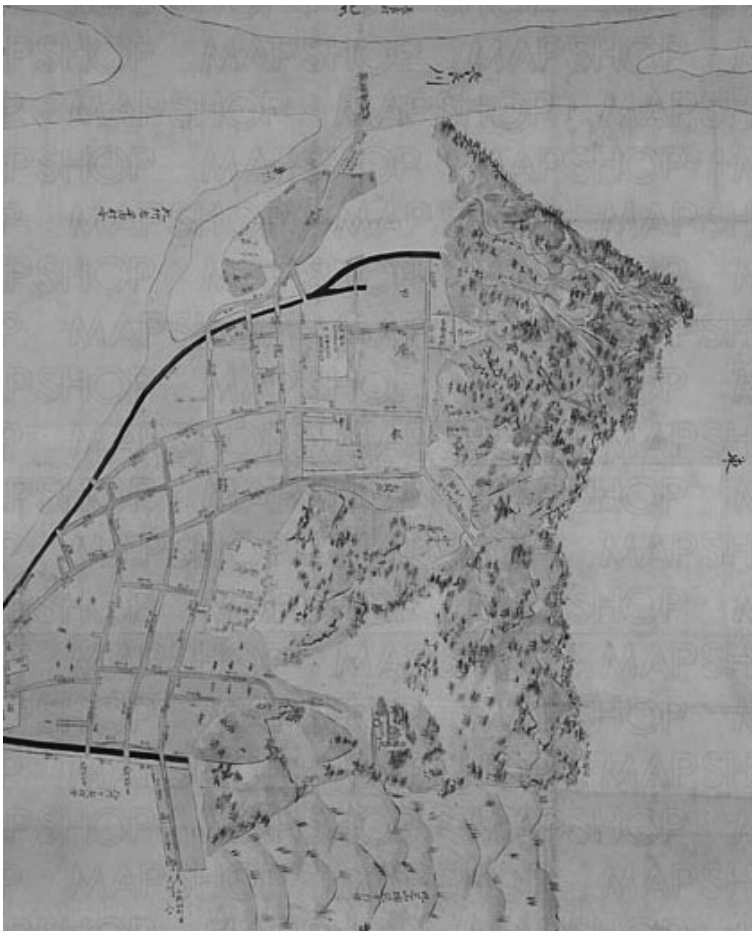
城下町の形成

岐阜の城下町は斎藤道三に端を発するとされていますが、それ以前にも大永5年（1525）の乱で長井氏（道三の父といわれる）が最後に稲葉山城に拠っていることなどから、長井氏の影響下にあり、そして、仁和寺の尊海僧正や醍醐寺理性院の僧厳助が移動の際に宿をとっていることから、すでに宿駅機能を備えていたと考えられています。

信長の城下町

『信長公記』には、永禄10年（1567）に信長が稲葉山城を攻めたときに町に火をかけたとあります。その後、尾張の町人を移住させて新たに町をつくったといわれています。

江戸時代前期に作成された「濃州厚見郡岐阜図」は、この地の町の様子を描いた最古の絵図ですが、町名が記入された道路が描かれていることから、当時の町割りが道を中心に行なわれていたことがわかります。また、金華山麓の西側に「古屋敷」の文字があることから、この辺りには屋敷地が広がっていたと考えられます。さらに、町を囲う土塁と塀が描かれており、土塁の北側には中河原（現川原町）があります。信長は舟木（材木や薪、炭）に対して特権を保護し商取引の独占を認めていましたが、その舟木座はこの辺りにあったと考えられています。



「濃州厚見郡岐阜図」（名古屋市蓬左文庫蔵）

山科言継が見た城下町

京都の公家、山科言継は永禄12年（1569）から元亀（げんき）2年（1571）の間に3度岐阜を訪れています。『言継卿記』にはこの時期の岐阜の様子が詳しく書かれています。

言継は朝廷の使者として信長と対面するため岐阜城内に入っていますが、城下町についての記録から、当時のにぎわいの様子がわかります。江戸時代の城下町では、上級武士、下級武士、商工業者、町民といった身分に応じて居住地が分けられていますが、この頃の岐阜城下町には、丹羽長秀や林秀貞といった重臣クラスの家臣と商家がごく近所にあったようです。言継が最初に宿とした「塩屋（しおや）」は城から遠く、城下町の外側に存在したと考えられますが、この「塩屋」を営む大脇伝内（おおわきでんない）は、織田家馬廻（うままわ）りも務めていました。



楽市立体絵巻（岐阜市歴史博物館）

3－4　武田信玄からの使者（秋山虎繁）を鵜飼で接待

永禄11年（1568）、信長は甲斐の戦国大名、武田信玄からの使者を岐阜に迎え入れます。信濃飯田城を預かる武田氏の重臣の秋山虎繁です。信長による岐阜での厚いおもてなしは、この頃から始まります。

武田氏との同盟を図る

尾張にいた頃、美濃侵攻を図る信長は、東方の脅威への対応策として武田氏と同盟関係を築きます。岐阜へ本拠を移してからも、武田氏との同盟関係の継続を願い、永禄10年（1567）信玄の娘・松姫を嫡男信忠にもらいうけたい旨を申し入れました。信玄はこれを受け入れ婚約が成立し、信長から信玄へのお祝いの使いが遣わされます。この返礼として秋山虎繁が岐阜を訪れます。

虎繁が信玄からの贈り物を進呈すると、信長は七五三の膳で応えました。献立は7献まで続き、信長が直接饗応したようです。3日目には丹波猿楽の梅岩大夫の能を観た後、長良川で鵜匠を集めて鵜飼の観覧も行ないました。この時も虎繁の船を信長の船同様に仕立て、さらに、信長が獲れた鮎を直接虎繁に披露するといった大変なもてなしようでした。虎繁の滞在期間中、おもてなしは続いたのでしょう。



ぎふ長良川鵜飼



岐阜城と観覧船

贈り物の中身

『信長と信玄が取り交わした贈り物内容については『甲陽軍鑑』に記されています。信長からは、虎皮3枚、豹皮5枚、緞子100巻、金具の装飾を施した鞍鐙10具、息女へは厚板100反、薄板100反、緯白100反、織紅梅（経糸が紫色、緯糸が紅色の糸で織った織物）100反、銭1,000貫、けかけ（絵模様に金箔を貼ったもの）の帯、その他酒肴が贈られました。

一方信玄からは、信長への酒肴の他、越後有明の蝋燭3,000挺、漆1,000桶、熊皮1,000枚、馬11頭、信忠へは大安吉の脇差、義弘の刀、紅1,000斤、綿1,000束、馬11頭が贈られています。信玄からの贈り物は甲信地域で調達されたものが中心だったようですが、信長からの贈り物は京都や外国からのものもあったと考えられています。このことからも信長がいかに「おもてなし」につとめていたかが窺われます。



鵜匠家に伝わる鮎鮨

3－5　ルイス・フロイスとの交流

信長は日本に渡ってきた宣教師たちにキリスト教布教を許可し、彼らと積極的な交流を行いました。中でもポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは山上の城まで招待し、もてなしています。そして、彼らとの交流のなかで海外の文化や情報を得て見分を広めていました。

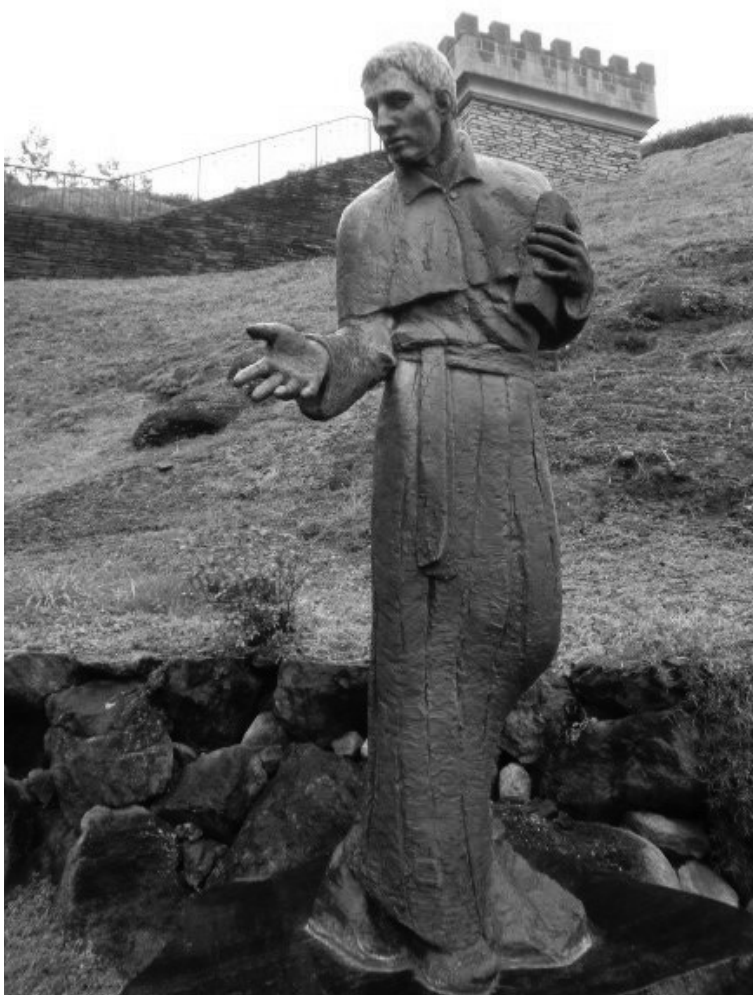
岐阜城訪問

永禄12年（1569）、フロイスは、義昭（よしあき）を擁して上洛し活躍がめざましい信長と、烏丸中御門第（旧二条城）の建築現場で初めて対面します。このときフロイスは信長にロウソクなどとともにガラス瓶に入った金平糖を献上します。信長は異国のこの珍しい食べ物を大変喜んだといわれています。信長がこれまでの仏教のあり方を好ましく思っていなかったこともあり、フロイスはその信任を得て、岐阜（ぎふ）を訪れるとともに畿内での布教を許可され、キリスト教信者を開拓していきます。

1回目の岐阜訪問では、フロイスは宿泊した宿主に冷遇されますが、2，3日後に佐久間信盛（さくまのぶもり）と柴田勝家が京都から戻ると信長に会えるよう取り計らいます。信長はフロイスの来訪を非常に喜び、山麓の居館に招待しました。フロイスは茶室で高価な品を拝見し甘い物を提供されます。

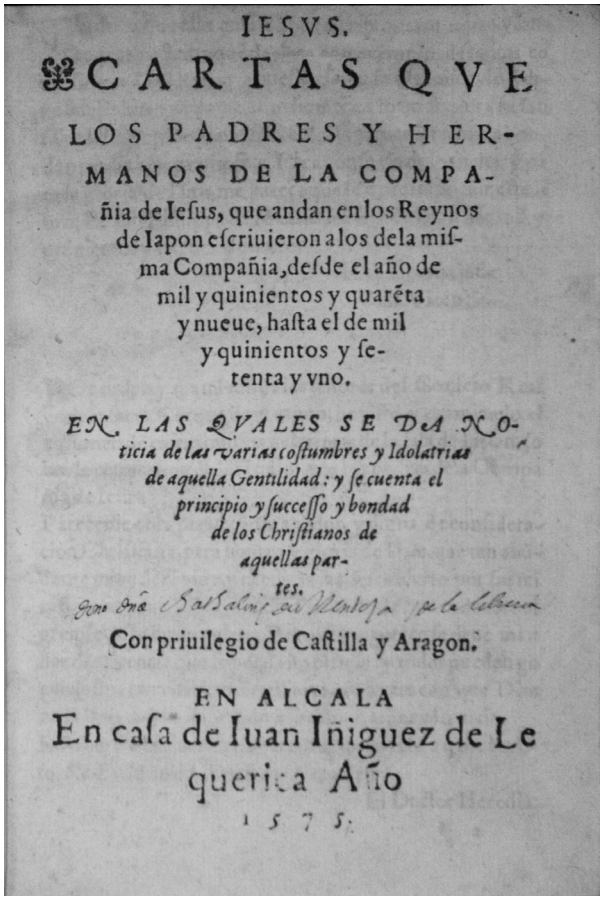
このとき、信長は、ポルトガル宣教師一行に京都での居住を許可する書状や義昭へあてた布教保護の朱印状も発給しました。この後、山上の城にも招待しています。

フロイスの2回目の岐阜城来城は、元亀（げんき）元年（1570）、日本布教長のフランシスコ・カブラルに随行して実現しました。一行は信長の右筆武井夕庵（たけいせきあん）の仲介で信長と面会します。



横瀬浦公園のルイス・フロイス像（坂井公明作 長崎県西海市）

カブラルは首飾り、絹製の赤いツバ付帽子、精錬された銀でできたベルトと鎖飾りを信長に贈りました。歓談中に信長は自らイチジクなどの果物を運んで振る舞ったそうです。そこでフロイスから京都での布教保護を依頼されると、信長は同席した将軍義昭の側近の三淵藤英にその旨を伝えています。饗宴の後、信長から「巻き紙」「80連」の贈り物が用意され、信長の計らいで、一行は町の人々の歓待を受けたとのことです。このように信長が宣教師一行を貴人として扱ったことは、布教の助力となっただけでなく、彼らの生活面も好転させたと考えられます。

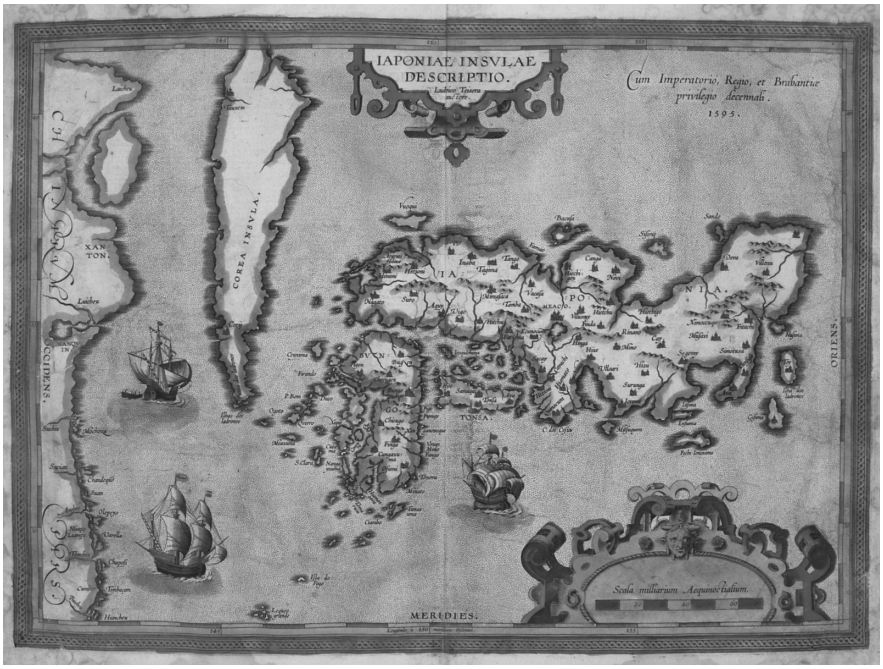

IESVS.
CARTAS QVE
LOS PADRES Y HER-
MANOS DE LA COMPA-
ñia de Ieſus, que andan en los Reynos
de Iapon eſcriuieron a los dela miſ-
ma Compañia, deſde el año de
mil y quinientos y quarẽta
y nueue, haſta el de mil
y quinientos y ſe-
tenta y vno.
EN LAS QVALES SE DA NO-
ticia de las varias coſtumbres y Idolatrias
de aquella Gentilidad: y ſe cuenta el
principio y ſucceſſo y bondad
de los Chriſtianos de
aquellas par-
tes.
Con priuilegio de Caſtilla y Aragon.
EN ALCALA
En caſa de Iuan Iñiguez de Le
querica Año
1575.

イエズス会日本報告集　アルカラ版（岐阜市歴史博物館蔵）

フロイスの生い立ち

信長と関係の深かった宣教師ルイス・フロイスは、1532年にリスボンに生まれました。9歳でポルトガルの宮廷に仕え、16歳でイエズス会に入会します。後に日本宣教へ向かう直前のフランシスコ・ザビエルと日本人協力者ヤジロウに出会い、1561年にはゴアで司祭に叙階され、語学と文筆の才能を高く評価されて各宣教地からの通信を扱う仕事に従事します。

永禄6年（1563）、31歳で長崎に上陸し日本での布教活動に就きます。日本語を学び、翌年に京都に入り、ガスパル・ヴィレラらとともに布教活動を開始しました。しかし、キリスト教保護者として頼った将軍足利義輝（あしかがよしてる）が永禄の変で殺害されると、三好氏らによって京都を追われ、摂津国・堺に避難しました。永禄9年（1566）にヴィレラが九州に行くと、フロイスは京都地区の布教責任者となりました。



日本図（ティセラ 岐阜市歴史博物館蔵）

『日本史』編纂

天正11年（1583）、フロイスは、日本におけるイエズス会の活動記録をヨーロッパに報告する仕事につきます。この事が後に『日本史』を著作するきっかけになりました。フロイスの著作は、戦国期研究における重要な資料の一つになっています。

手紙の種類

宣教師たちは日本で行った布教活動の様子を書簡にしてヨーロッパに報告していました。当時の輸送手段は船ですから、1通だけでは航海中に遭難してしまうかもしれませんでした。そこで、原本のほかに写本やスペイン語などに翻訳したものを作成し、複数の書簡を別便で送りました。 ヨーロッパでは布教の様子を広くイエズス会員に知らせるために、手紙を活字化しており、こうして1通の手紙から複数の写本や印刷物が作成されていったのです。

フロイスの永禄12年（1569）岐阜城来訪時の記述としては、もっとも原本に近いと考えられるリスボン国立図書館所蔵の写本、手紙を集めて印刷した書簡集（アルカラ版、エヴォラ版）、そして書簡を下敷きにして執筆された『日本史』の4つが知られています。

3－6　公家衆の岐阜入り

信長が京都を留守にしている間、幕府で解決に至らない問題など、信長への訴訟のため岐阜（ぎふ）へ下る者も多くいました。その中には身分の高い公家も含まれていました。



岐阜城からの眺望

山科言継の岐阜入り

永禄12年（1569）4月、信長は将軍義昭（よしあき）の新邸烏丸中御門第（旧二条城）の完成をみると、美濃への帰国の途につきます。

同年7月、京都の権大納言山科言継（ごんだいなごんやましなときつぐ）は、後奈良天皇の十三回忌法会（ほうえ）の費用を徳川家康に出してもらうために三河に向かい、その途中で岐阜に立ち寄ります。言継は塩屋（しおや）の大脇伝内宅（おおわきでんない）に泊まり、信長への面会を希望すると、信長側近の武井夕庵（たけいせきあん）が使者として現れ、麓の信長居館で会う旨を伝えられます。信長は高齢の身で酷暑のなかを三河へ行こうとする言継に配慮し、自分が家康に飛脚を送り要件を伝えるとともに、もし三河で銭の調達がうまくいかないときには自分が200貫文を進上するといって、言継を岐阜に留めました。言継は1か月余りの岐阜滞在中に、長良川や法華寺、善



法華寺（岐阜市矢島町1丁目55）

光寺などを訪れています。

そして、言継は山上の城へも招待されており、信長から囃子（はやし）や食事によるもてなしを受けました。なお、この時の食膳の給仕は信長が務めたとされています。その後は城中を案内され、山上からの眺めを称賛しています。

また、信長の計らいで家康から希望通りの資金を調達することができました。

言継はこの後、2年間に2回岐阜を訪れ、朝廷や自分の所領が織田家の家臣によって押領されていることを信長へ愁訴しますが、信長は言継との面会をいずれも敬遠しており、対応は冷淡だったといわれています。この対応の差は十三回忌法会のような朝廷の儀式に関わる案件と、家臣たちの利害が絡む所領問題との違いであり、目的にあわせて対応を変えていたと考えられています。



善光寺（岐阜市伊奈波通1丁目8）

その他、公家衆、商人の訴訟

その頃信長は岐阜で、摂関家の一条内基（いちじょううちもと）、その舎兄勧修寺門跡（しゃけいかじゅうじもんせき）、烏丸父子、飛鳥井（あすかい）黄門、堺の商人今井宗久らとも会っています。一条内基は日野輝資（ひのてるすけ）との間で争論があり、信長の裁許を求めて岐阜に来ていました。この件では内基の主張が認められ、翌年在京中の信長を訪ね、礼銭を進上しています。公家らが、信長に訴訟するため、あるいは礼を申すために下向しているのは、公家らの望む所領安堵等の実質的な決定権と保証、違乱排除の力が、幕府や将軍より信長にあることを知っていたからであると考えられます。岐阜にいながら信長は、朱印状の発行も行っていたといわれています。

3－7　堺の茶人、津田宗及



堺の茶人、津田宗及は岐阜を訪れ、信長のおもてなしを受けます。その素晴らしさは、天王寺屋3代（津田宗達・宗及・宗凡）にわたる茶事の記録『天王寺屋会記』に記されています。

岐阜来訪

天正元年（1573）11月、宗及は信長が主催した京都妙覚寺での茶会に参加しています。

そして、天正2年（1574）正月には岐阜の信長の元を訪れます。1月29日に信長に挨拶をして岐阜城下に滞在していると、2月1日に信長の近臣塙直政が使者として現れ、「あなたが見たことのない茶道具をいくつか報告しなさい」といわれます。その翌日に信長を訪ねると、宗及が伝えた茶道具が用意されており、翌々日には信長の饗宴を受けることになります。

『天王寺屋会記』によると、信長のもてなしは「茶湯」であったとされています。茶湯といっても、手前のみではなく饗膳をふるまう会席も行なわれ、今でいえば、茶席と点心による茶会といえます。

津田宗及の生涯

津田宗及は堺南荘の豪商・天王寺屋の津田宗達（1504年-1566年）の子として生まれます。茶人・武野紹鷗の門人であった父に茶道を教わります。また、大徳寺住持の大林宗套には禅を学び、後に天信の号を与えられます。宗及は、後に信長や秀吉の茶頭となります。

堺の大小路に居所を構える天王寺屋は堺でも有力商人として知られ、宗及は永禄年間には石山本願寺の下間丹後の一族と通じ、次いで堺に勢力を張った三好政康を頼みとしていましたが、やがて伸長してきた信長に接近していきます。

天正6年（1578）、信長が堺を来訪した際には、自邸に訪問を受けるなど、重用されました。後に実権を握った豊臣秀吉にも信頼を得て茶湯者八人衆の一人として数えられ、今井宗久、千利休とともに3,000石の知行を与えられました。天正19年（1591）に死去したとされています。

茶湯のおもてなし

宗及が席に着くと、これまでに見たこともない様々な茶道具が飾られていました。

床に飾られた玉澗（中国の詩画僧）の墨画・煙寺晩鐘をはじめとして、中国の宋代から元代の名品を中心とした豪華な室礼でした。煙寺晩鐘は松永久秀の旧所持品、唐物茶入・紹鷗茄子や唐物茶壺・松島は堺の豪商今井宗久から信長へ進上されたものというように、戦国武将や堺の商人からの和睦の証や恭順の証として進上された品々が並べられました。

信長は茶湯を政治的に利用していたとされています。この日の茶湯で、戦国武将や堺衆から進上された道具を見せたことは、堺衆も信長に恭順している様子を宗及に誇示するためとも考えられます。この日、床に飾られた花入「蕪無」に敷かれていたのは、前日に宗及が信長に進上した彫漆の盆でした。宗及が見たこともない数々の名品のなかに宗及旧蔵品を並べるという、信長なりの「おもてなし」の演出だったと考えられます。

献立は本膳（焼鳥・蔓汁・鮒鱠・前塩・塩引〈干物〉・御飯）、二の膳（鱒の焼物・このわた・辛螺壺煎・鱈汁・海月・熨斗引）、三の膳（鯉の刺身・酢・生白鳥汁・生貝）と続き、さらに鮒、白魚の吸物、そして酒やデザートの枝柿も供されました。



信長料理復元模型（岐阜市歴史博物館蔵）